

特集

埼玉に暮らす

— 子育て編 —



特集① 親子が安全に生活していくために

県立小児医療センターには、治療の必要な子どもとその保護者が訪れ、中には日本語がままならない親子もいます。そのような時は、医療ソーシャルワーカーが保護者の気持ちに寄り添いながら、適切な医療が受けられるよう、当協会の通訳ボランティア派遣事業を利用し、対応されています。外国人の親子を支える医療の現場での取り組みについて、お話を伺いました。

埼玉県立小児医療センター ソーシャルワーカー 松平 知香さん



外国人の子どもの受診

昨年暮れに、岩槻からさいたま新都心へ移転し、外国の方の受診が増えたように感じています。また、通訳を必要とされる方が増える傾向にあります。以前は日本語ができる同じコミュニティや職場の方、親族の方などが同行するケースもありましたが、支援者がいない方も多くいます。昨年度、通訳ボランティアの派遣を利用した外国の方は27組で、ベンガル語やウルドゥー語などのあまり馴染みのない言語も含まれます。

移転後に、さいたま赤十字病院産婦人科と当院のNICU（新生児集中治療室）が一体化した総合周産期母子医療センターでは、高度な新生児集中治療を行っています。中には、外国の母子もいらっしゃいます。

大事なお子さんの治療なので、病状、障害、治療方法等について、理解いただき、納得して、治療を受けられるようにするために、通訳は重要なパートナーだと考えています。

外国人親子を受け入れる際の配慮、さらにその先のこと

外国人親子が受診し、治療を受ける上で一番配慮しているのは、文化や風習の違いです。そこには、宗教や食文

化、さらには看取りの仕方なども含まれます。また、日本の行政手続きを利用する際、言語が伝わらないことによる不要な煩わしさや傷つきを受けないようにといったことにも気を配っています。国民性や風習の違いにより、時間通りの来院が難しい方もいます。そういう部分の違いも含めて理解し、状況に応じて、予約日の前に来院確認の連絡をとるといったことにも留意しています。

異文化の中での出産・育児・病気は、不安の連続です。通訳を介しての生活支援は、親子が安全に暮らしてゆくためのパーソナルサービスだと感じています。

今、育児に関する相談窓口は多く設置されてきています。しかし、言葉が通じない場合には、その相談窓口さえ利用することはできません。近所の小児科にかかる場合にも通訳がつくことはなく、言葉が通じないことで、受診しても理解できないケースもあります。日本語ができなくても、気軽に相談できる場所が増え、また必要な医療等のサービスを受けることが容易になるとよいと思います。2020年のオリンピックが迫り、埼玉ではさらに外国人が増加することも予想されています。地域全体が外国人を受け入れやすくなる環境となることを願います。

特集② 外国にルーツのある親子と一緒に

産前産後・子育て中の外国にルーツのある親子対象の『多文化子育ての会Coconico(ココニコ)』&そこに参加しているお母さん達にお話を伺いました。

Coconicoはどんなところ？

多文化子育ての会 Coconico 代表 井上 くみ子さん
Coconicoは日本人でも孤立しやすい産前産後・子育ての時期に、外国にルーツのあるお母さん達に仲間づくりの場を作りたいと思い、2009年に始まった会です。
参加のきっかけは様々で、友だちに誘われたり、チラシ

やfacebookで見つけて来てくださる方もいます。毎回5組前後の親子が集まり、母語ややさしい日本語が飛びかい、賑やかな時間を過ごしています。

お母さんが日本でも母国にいたときと同じように、能力を発揮できる活躍の場を一緒に作っています。イキイキと活躍するお母さんを見ることは子どもにとっては嬉しい

ことです。料理教室の講師やおはなし会の母語での読み聞かせや手遊びの紹介も、そんな活躍の場の一つです。

Coconicoのように、気軽に相談したり、ちょっとお願いごとをしたり、そんな関係を地域や学校でもつくることで、外国人も日本人も暮らしやすい社会になると思います。

Coconicoに参加して

夏 紅霞さん・張 園園さん・賀 瑩さん・王 静さん・左 麗さん

ここに来て、たくさんの友達ができました。この日本人スタッフとは、気楽に接することができます。ちょっとした言葉のニュアンスや言葉の裏の意味など、日本独特の言い回しの意味を聞けることで、本当に助かっています。日本人なら自分で情報収集できることでも、自分の国との違いや言葉や制度の壁があり、準備が遅れることがあります。そうなる前に、何でも相談できるCoconicoは有難い場所です。

BBQやお花見、遊園地や動物園などへ、みんなで一緒にお出かけを楽しんでいます。今後は子どもと共に日本

特集③ 埼玉で子どもを育てる！

日本で暮らす外国出身の子ども達も日本人と同じように保育園や幼稚園に通っています。埼玉で子育てをしている外国出身の保護者と、その子ども達を受け入れているさいたま市立領家保育園でお話を伺いました。

「日本での子育て」、中国との違いは？

園児の保護者 宇田 晶さん

中国では、子ども一人を両親とその祖父母が大事に育てます。祖父母は近くに住み、過保護すぎるくらい孫を大切にしています。私は祖父母や親せきが近くにいないので、子育てに口を出されることがなく、自由に子育てをしています。中国では祖父母が孫の身の回りの世話をやき過ぎる傾向があるので、中国で育ち、その後、日本に来た子どもは服の着脱や食事一人ではままならないケースがあります。

日本ではトイレに子ども用チェアがあり、オムツ交換台や授乳室がどこに行ってもあります。子連れで出かけるハードルが低くなり、とてもいいと思います。また、中国では体の表面が寒気に触れることで、体の中に悪いものが入り、病気になると考えられているため、この季節、服をたくさん着せます。日本の子ども達はとても薄着でびっくりします。冬に半袖半ズボンの小学生を見かけたりすると、寒くないのか風邪をひかないのか、心配になります。

息子は日本で育てるつもりですが、中国語は身に付けてほしいと思っています。家で中国語を話す時間を設けたり、外国語の絵本を図書館で借りて、興味を持たせるようにしています。今後、息子は日本で生活し、育っていくので、中国を母国と言えるのか、中国語を獲得できるのか、多少の心配事はありますが、自由な精神で個性を持ち、成長してほしいと願っています。

外国出身の親子の保育園への受け入れ

園長 配島 早苗 先生

この園には数名の外国出身の子どもが通っていますが、地域により、外国出身の子どもの割合が変わり、国籍にも

のお祭りや年中行事も体験していきたいです。

子育て中は人間関係の難しさを感じることも多いと思います。それを相談できる場所や人がいることは大切なことです。多くの地域に、仲間づくり、相談、親子のお出掛けの場が増えてほしいです。



特色があります。

出身国の宗教や文化の違いによって、食事や活動の面での配慮が必要な場合があります。肉除去食を提供したり、お弁当で対応してもらうこともあります。また、クリスマスやハロウィンなどの宗教的なイベントの参加をとりやめたり、散歩で行く神社の鳥居をくぐらないようお願いされることもあります。もちろん日本人でも同じようなケースはあります。

子どもが全く日本語ができない場合があり、単語とジェスチャーで対応したこともあります。また、英語しか読めない保護者のために、翻訳ソフトを使い英訳し、毎日の連絡帳を記入したこともありました。同じコミュニティのお友達や親せきなどで日本語のできる方を連れて、説明を聞きに来る方もいます。兄弟で通園していて、上の兄弟が下の兄弟の教室に来て通訳をすることもあります。

外国出身の子どもに限らず、全ての子どもに配慮し、適切な保育が受けられるようにと心がけています。

